主要事業の活動内容と成果、課題

（2）グローバルセミナー教育

重　田　康　博

（1）はじめに－その変遷と定義

「グローバル教育セミナー」は、2009年以来グローバルな問題を扱うセミナーとして毎年開催されてきた。私は、過去に勤務していた財団法人国際協力推進協会で「開発教育」を担当しており、開発教育の推進を目指して1986年から1994年まで日本国内で活動していた。その後は、イギリスに渡り、イギリスの開発教育の調査を行い、イギリスの開発教育の実践を学んだ。帰国後は、開発教育協会の理事や監事として開発教育の推進に当たってきた。

2007年に宇都宮大学国際学部に来て、この開発教育を宇都宮大学で行うことができないかと考えたのが本セミナーの始まりであった。開発教育という名称は、伝わりにくいので、「グローバル教育」という名称を使った。多文化公共圏センターがまだ設立されたばかりで、田巻先生のHANDSプロジェクト以外に目玉になる事業がなかったので、このセミナーを行うことにした。

グローバル教育について最初にその概要を触れておくと、1970年代の米国で誕生し、グローバル・パースペクティブの視点を取り入れた活動が行われる。その後は欧州諸国に受け継がれ、英国の「ワールド・スタディ」プロジェクトに繋がっていく。1970年代から1980年代にかけて国際理解教育、開発教育が国連で紹介され、これらの教育が欧米諸国政府、NGOにより開始される。1992年国連環境開発会議（通称地球サミット）が開催され、世界の国々は開発と環境の調和を目指す「持続可能な開発（Sustainable Development）」が提案され、環境教育が本格的に開始される。このような時代の流れの中で、グローバル教育は欧米諸国で行われることになる。1999年ヨーク・グローバル教育センターで活動し英国のグローバル教育の創始者であるロビン・リチャードソンは、「グローバル教育は、地域からグローバルまで多くの異なるレベルに焦点を合わせる教育活動である。また、人々の気持ち、関係性そして一人ひとりのアイデンティティーに対する価値への関心、同様に情報と知識の教育の総体的考え方を意味する」（Center for Global Education のパンフレットより）と定義している。また2002年の欧州グローバル教育会議（Europewide Global Education Congress）において、欧州評議会南北センターの「グローバル教育宣言（The Global Education Charter ）」では「グローバル教育は、人権教育、平和教育、開発教育、環境教育、持続可能な学びの間の相互作用の発展を奨励する教育である」と述べている（注１：Europe-wide Global Education Congress, Maastricht, The Netherlands, November 15th – 17th 2002, https://rm.coe.int/168070e540　2020年11月30日閲覧）。

2000年から2001年にかけて、国連ミレニアム宣言文とその８つの開発目標が2015年までに実現することが発表され、2002年国連ヨハネスブルグ・サミットで「持続可能な開発のための教育（ESD）」が提唱された。その他に、市民教員（Citizenship Education）、グローバル市民教育（Global Citizenship Education）、グローバル学習（Global Learning）を推進している国もある。2013年11月第37回ユネスコ総会で採決さ

れた「あいち・なごや宣言」では、「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム」（GAP）の具体的な実施に向けて、各ステークホルダーがESDを更に強化し、そのための行動を起こすことを宣言した。「ESDに関するユネスコ世界会議の成果文書」では、「国連ESDの10年」の後継プログラムとして、（１）政策的支援、（２）機関包括的取組、（３）教育者の育成、（４）若者の参加の支援、（５）地域コミュニティの参加の促進）を定め、ステークホルダーからコミットメントという形で2015年以降の具体的な計画を収集し、2015年以降のＥＳＤの取組を推進する、５つの優先分野が決められた（文部科学省　資料２-２　我が国における「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム」実施計画（案）持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議https://www.mext.go.jp/unesco/004/detail/1371100.htm。2020年11月30日閲覧）。

（２）目的と特徴

本「グローバル教育セミナー」の目的は、「宇都宮大学学生などを対象に、普遍的で多様性のある地球市民の視点をもった人材を育成するために、グローバルな課題を身近に認識し、地域で活動する場を提供すること」である。

その特徴を下記５つ挙げる。

第１に、グローバルな問題を扱っていることである。本セミナーは、現在世界で問題になっているグローバルな問題（Globalization）をテーマとしているが、その一方グローカルな問題（Glocalization）を栃木県や宇都宮市の地域の問題に引き付けて行ったこともある。

第２に、地域の担い手（学生など）が一緒に企画・運営を行っていることである。本セミナーは、グローバルな問題について、国際学部の学生など地域の担い手が主体的・実践的にセミナーの企画・運営を行っている。学生がこれらのプロセスを通じて主体的に学び、グローバル問題について理解と認識を深め、世界にある諸問題の解決に対して積極的に行動してくための「グローバルな実践力」や「将来のキャリア形成への意識」を養っている。

第３に、国際学部の再編科目と一体化していることである。本セミナーでは、グローバルな問題について、国際学部の再編科目「グローバル・イシュ―研究演習Ⅰ・Ⅱ」や「多文化共生コアC（地球市民社会論）」と一体となって開催していることである。学生は、グローバル教育セミナー開催前に、「〇〇問題と私たち」というテーマの授業で90分の発表を行い、「地球市民社会論」の授業で10分発表する準備を行い、当日グループ別に発表する。

（３）テーマとキーワード

「グローバル教育セミナー」は、2009年から2020年まで開催されたが、過去にグローバルな問題をテーマにしてきた。過去の開催のテーマは、以下の通りである。

09年度第１回

「最初の一歩～地域からグローバル問題を考える」立教大学田中治彦

10年度第２回

「グローバル教育と地域の生活」フェアトレード高須花子、吉田ユリノ、鯨井智廣など

11年度第３回

「ポスト開発／脱成長時代における教育の果たす役割を考える」：西川潤、中野佳裕、楠利明、半田好男、阪本公美子など

12年度第４回

「地域で世界につながるまちづくり―国際協力・地域再生のための市民・大学生ができること」ESDJ村上千里、陣内雄次、大浦智子

13年度第５回
「子どもの貧困とグローバル教育」甲斐田万智子、吉野裕之、早川千晶など
14年度第６回
「子どもの貧困とグローバル教育Ⅱ」成田由香子、徳山篤など
15年度第７回
「アジアにおける社会企業とグローバル教育」倉田浩伸、吉田ユリノなど
16年度第８回
「難民問題とグローバル教育」難民支援協会石川えり
17年度第９回
「難民問題とグローバル教育」IVY阿部眞理子
18年度第10回
「水問題とグローバル教育」ウォータエイドジャパン高橋郁
19年度第11回
「教育問題とグローバル教育」シャンティ国際ボランティア会鈴木晶子
20年度第12回
「グローバル教育とSDG３保健医療問題」シェア=国際保健協力市民の会仲佐保

以上の通り、本セミナーではグローバルな問題をテーマにしているが、過去のセミナーのキーワードとして、以下のものが挙げられる。

グローバル教育、ESD、フェアトレード（フェアトレードタウン）、ポスト開発・脱成長、子どもの貧困、難民、SDGｓ（水、教育、保健医療）

（４）課題と今後の展望

最後に、「グローバル教育セミナー」のこれまでの課題と今後の展望を述べる。

第１に、グローバルな問題をどのように地域の問題に引き付けるのかを考えることである。これまで本セミナーは、上記の通り、12回開催されてきたが、グローバルな問題をどのように栃木や宇都宮など地域の問題に引き付けて開催していくかである。例えば、地域の生活やまちづくりなどについて、フェアトレードやフェアトレードタウンの活動と結びつけて行ってきたが、長年活動しているとそれもマンネリになってきてしまうし、担当者も高齢化してくるという問題もある。今後は、全学でSDGsワーキングが立ち上がったので、SDGsの課題に関する地域の問題と結びつけて行うことが求められる。

第２に、学生、地域の担い手、行政などをどのように企画・運営を一緒にやっていくのか、である。当初は栃木のNGOやYMCAも企画・運営を考える運営委員会に参加していたが、最近は授業で企画・運営を行っている関係もあり、国際学部の学生が企画・運営に参加している。授業で行うと、他のアクターの人が参加しづらくなってしまう課題がある。今後は、栃木県や宇都宮市の他のアクターの人たちが参加できる企画や運営を検討する必要がある。

第３に、研究、教育、社会貢献をどのように結びつけるのか、についてである。

グローバルな問題について、教員、院生、学生の研究にどのように結びつけていくかである。教員が扱っている研究課題のみ扱うと、深くなり過ぎ、学生がその研究課題に関心のない場合もあり、どのような課題を扱うのかむずかしい。今後は、グローバルな課題に関して、研究、教育、社会貢献とバランスをとりながら、セミナーのテーマを考えるといいかもしれない。また、海外の大学やパートナー団体との共同企画で開催することも一つの案である。

第４に、全学、学部の動きとどのように一体性を持つのか、を検討することである。

本セミナーの企画・運営について、全学の動きと国際学部多文化公共圏センターの動きをあまり考えずに活動を続けてきた。しかし、今後

は全学の動きと多文化公共圏センターの動きを見つめながら、センターの企画・運営を検討していく必要があるであろう。例えば、全学のSDGsワーキングの動きやグローバル人材育成事業の動きを見据えながら進めていくとよいかもしれない。20年度第12回のセミナーでは、全学のSDGsワーキングに後援団体になってもらうことをお願いしたが、全学に合わせる動きの一つと考えていいだろう。

2019年「第11回グローバル教育セミナー「教育問題とグローバル教育」基調演講: 鈴木晶子氏（公益社団法人シャンティ国際ボランティア会）より

2013 年第5回グローバル教育セミナー「子どもの貧困とグローバル教育」基調講演：甲斐田万智子氏（国際子ども権利センター）より